2017年3月19日　中原キリスト教会聖日メッセージ

**「モーセの執成し」**

聖書箇所：出エジプト記32:7-14

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日はモーセ五書の二番目の文書である出エジプト記からです。お読みいただきましたのは第32章の一部です。通常、「モーセの執成し」と称せられています。イスラエルの民はモーセに率いられて奴隷の状態にあったエジプトを脱出し、カナンの地に向かったのですが、途中で、主なる神を裏切り、エジプトに留まっていた方がよかった、などとつぶやき、モーセを通して与えられた十戒に反する思いと行いを繰り返しました。本日の箇所は、そのようなイスラエルの民のためにモーセが取り成しの祈りをするところです。実はこのイスラエルの罪は繰り返し発生し、そのため、モーセは三度、執成しの祈りをします。本日の箇所はその第一の執成しのところです。第二の執成しは、32:30-35、第三の執成しは、33:12-16です。今日は、この三つをかいつまんでお話しします。

　では、本日の聖書箇所を含む32章に入ります。ここは24章の続きです。24章の最後でモーセは40日山に籠っていた、と書かれています。その間に問題が起きたのです。モーセの留守中はモーセの兄アロンが皆のリーダーとされていましたが、イスラエルの民が“もうモーセがどうなったかわからないので、自分たちの先頭に立って行く神をつくってください”とアロンに頼みます。アロンは民衆の声に押されて、皆に金の耳輪をはずさせ、木で子牛をつくり、金を貼り付け、所謂「金の子牛」を作りました。そして、アロンに要求した人々は、民衆に対し、「イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である」と述べたと記されています。偶像礼拝です。十戒の第一戒、第二戒違反です。あの祭司アロンがなぜこんなことをすることになったのでしょうか。ユダヤ教のラビも当然疑問に思い、いろんな解釈を試みています。実はモーセは留守をアロンともう一人フルという人物にまかせています。24:14に一回だけ、出てきます。このフルが民衆のいうことを聞かず拒否したので殺されてしまった。アロンはこれを見て自分も殺されるという恐怖から民のいう事を認めた、という説です。また、金の子牛ができてから、アロンは「あすは主への祭りである」と言っている。これは金の子牛が神であることを否定し、祭りの材料としてこれを使用し、礼拝するのは金の子牛ではなく、主なる神なのである、ということを意味している、という説です。これらの解釈はアロンを弁護して、祭司職が代々出たアロンへの敬意を保とう、ということから出た解釈です。そうかもしれません。“アロンも弱みを持った人の子であった“ということでしょうか。しかし、神様が許すはずはないのに、どうして罰せられず祭司職の先祖になったのでしょう。モーセによる執成しと、イスラエルの民と共に悔い改めたからだ、と解釈されていますが、なにか釈然としません。死に値する律法違反であり、ましてや祭司がなした罪ですから極めて重大です。おそらく、聖書には記されていない、モーセによる特別の執成しの祈りがあったと考えなければなりません。おそらく主イエスのゲッセマネの祈りのような血がにじむ執成しがあったのだと思います。むしろ、それが、モーセがカナンの地に入ることを許されなかった原因のひとつであろう、と思われます。

　むしろ我々信仰者にとって重要なのはイスラエルの民の行動です。まず、イスラエルの民は「私たちをエジプトの地から連れ上ったあのモーセという者」と言っており、出エジプトを導いたのが主なる神ではなくモーセをいう人間だと思っていることです。ここに根本的な不信仰があります。人間により頼むと裏切られることが必ず起きます。信仰とは神様を信頼し、より頼むことです。時には疑い、迷いもあるでしょう。しかし、個人の人生においても人間の歴史においても転機と思われる時があります。そのような時は、神様は何を望んでおられるのか祈りの中で御心を求める必要があります。イスラエルの民は、モーセを頼りにし、彼がなかなか帰ってこないので、当時の世界では広く行われていた牛を礼拝する宗教をよりどころにしようとしたのです。この偶像礼拝は人間の深いところにある罪のようであり、世界の宗教は堕落するとこの傾向が顕著になってきます。一種の豊饒神信仰です。イスラエルの信仰は人間による導きではなく、神による導きに信頼を置く信仰です。このこともあり、王制のスタートに際しては神様から警戒の言葉が投げかけられます。王制は王への個人崇拝になりやすいからです。他国では現代でもしばしばありますが政治的指導者の大きな写真を掲げて行進を行うのがあります。我々日本国民は戦前、天皇を神格化し、その名で国民を指導した人々によって誤った道を歩んだ歴史を持っています。「人によりたのむな、神にのみより頼め」がクリスチャンの原則です。全く同じと言う訳ではありませんが、牧師が代わると、信者が離れていく、というのも、これに近いものがあります。要すれば有限の存在により頼まず、無限の存在である神により頼め、ということです。また、我々は、礼拝（らいはい）ではなく崇敬であり、敬意を表しているだけのことだ、という言い訳もよくします。このこと自身は間違いではありませんが、崇拝と崇敬は境界線が曖昧ですから、時には本当に偶像礼拝になっていないか、をチェックする必要があります。いずれにしろ、特定の個人、それが親子、夫婦であっても100%委ねることはできません。

　32:7からが本日の聖書箇所です。モーセは山から下りてきて、イスラエルの民が金の子牛をとりまいてどんちゃん騒ぎのお祭りをしているのを見ました。主なる神の声がモーセに臨みます。32:9-10です。「わたしはこの民を見た。これは、実にうなじのこわい民だ。/今はただ、わたしのするままにせよ。わたしの怒りが彼らに向かって燃え上がって、わたしが彼らを絶ち滅ぼすためだ。しかし、わたしはあなたを大いなる国民としよう」という言葉です。「うなじのこわい（かたい）民」というのは強情なという意味です。モーセ個人は「あなたを大いなる国民にしよう」と言われているのですからこのような重大な罪を犯したイスラエルの民が滅ぼされるのはやむを得ない、と考えるべきところですが、なんと、モーセはこのイスラエルの民の弁護に必死になるのです。せっかくエジプトから連れ出した自分の民を滅ぼすなどというひどい方なのですか、と文句を言います。果ては、エジプト人がこの神は滅ぼすと言う悪意をもって民を連れ出した、と言われるだろう、などと言っています。全然筋の通った話ではありません。イスラエルを救う、と言われたはずではないか、と神様の矛盾をついているだけです。理由にならない理由をつけて最後はつつましやかそうに「どうか、あなたの燃える怒りをおさめ、あなたの民へのわざわいを思い直してください」と嘆願するのです。理屈にならない理屈を言っているところなどは逆にモーセの必死さを示している、ともいえるでしょう。そして、例の「アブラハム、イサク、ヤコブ」への祝福の約束を思い出して下さい、と神様に言います。なんと驚くことに「主はその民に下すと仰せられたわざわいを思い直された」のです。モーセの祈りの内容はどうでもよいのですが、主なる神が思い直された、のです。こんなことあるのでしょうか。イスラエルの神、ひいてはキリスト教の神は、絶対的権威者でありその決定は未来永劫変わらない、と考えがちですが、実は、思い直してくださる神なのです。

創世記のソドムの町の物語りのところで神様が堕落した町ソドムを滅ぼす決定をすると、アブラハムが必死になってこれを滅びから守ろうとするところがあります。50人の正しい人がいてもこの町を滅ぼすのですか、この50人のためにこの町を赦してくれても良いようなものだ、と神様に食らいつきます。「全世界をさばくお方は、公義を行うべきではありませんか」という挑戦的言葉さえ言います。50人の基準をどんどんさげ10人の正しい人のところまで滅びの条件を変更してもらいます。結果として10人も居なかったためかソドムは滅びます。ここでも思い直される主が示されています。

ヨナ書にも神の思い直しの箇所があります。主なる神は腐敗した町ニネベを滅ぼす決定をし、ヨナを通してそのことを伝えるのですが、ニネベの人々は神を信じ、断食をし、熱心に祈ったことにより神様が思い直しニネベの町は救われる、という話です。ヨナ書3:8-9をお読みします。ニネベの王の言葉です。「人も、家畜も、荒布を身にまとい、ひたすら神にお願いし、おのおの悪の道と、暴虐な行いから立ち返れ。/もしかすると、神が思い直してあわれみ、その燃える怒りをおさめ、私たちは滅びないですむかもしれない」とあります。出エジプト記32:12の「思い直す」という言葉はヘブル語では「na:ham」という言葉ですがこの語は色々な意味があります。「悔いる」「後悔する」「心を変える」「思い直す」「慰める」「慰められる」「和解する」というような意味があります。ヨナ書3:9の「思い直してあわれみ」とあるのは「shu:b＆na:ham」です。「shu:b」というのは「立ち返る」「戻る」という意味の言葉です。神に立ち帰れ、と言う時の「立ち返る」です。実はこの「shu:b」と「na:ham」の2つの言葉が一緒になって新約聖書の「悔い改め」の言葉になっているのです。「na:ham」の「悔いる」という意味と「shu:b」の「立ち返る、改める」という意味がこめられ「悔い改め」になっているのです。そして結果として「na:ham」の意味である神からの慰めを得ることができるのです。そうすると、神様が思い直されるため契機となるのはは何だろう、と考えると、信仰者の熱心な悔い改めの心にあるのではないか、と理解することができます。この「shu:b＆na:ham」が鍵です。悔いるといっても罪ある自分を責めよ、と言っているのではなく、神に立ち帰り、罪の許しを請い、主なる神により頼むことを確認することです。

こうして、イスラエルはモーセの執成しにより滅びを免れました。しかし、その後もイスラエル民の不信仰はやみません。モーセは十戒が刻まれた板を手にして、山を下りました。すると宿営からさわがしい音が聞こえてきます。なんと金の子牛を囲んで歌と踊りの騒ぎになっていました。32:22でアロンはモーセに「わが主よ。どうか怒りを燃やさないでください。あなた自身、民の悪いのを知っているでしょう。」と言い訳をします。ここで「わが主よ」と言っている時の「主」は主なる神、「ヤーウェ」を「主」と訳したのではなく、ヘブル語そのものも「ご主人様」という「adona:i」という言葉です。アロンは弟のモーセを神の使いと同様に扱って、「ご主人様」と言ったわけです。アロンは民の望みだったので金の子牛を作ったと、言います。これに対し、モーセはレビ族に命じ、三千人のイスラエルの民を殺させます。民数記1:46によるとエジプトを脱出したイスラエルの民の数はレビ族を除き、軍務につくことのできる者だけで603,550とされていますから、レビ族を含め、かつ女性、未成年者を含めると2百万くらいの人数になります。この数字から比較すると三千人はそれほど多い人数ではなさそうですが、なんと同胞を殺したのですからただ事ではありません。これはモーセ五書のあとにあるヨシュア記に書かれている「聖絶」の先駆けとみるべきです。ヨシュア記の「聖絶」はイスラエルがカナンの地を占領したのち、異教の民を殺し、滅亡させることです。新約の民である我々からみると残虐行為そのもののように見えます。これは、旧約聖書理解のなかで最大の難問です。当然のことながら古来、多くの議論がありますが、私自身は完全に、納得できる回答を見たことも、聞いたこともありません。しかし、この背後に純粋に主なる神への信仰に生きるイスラエル共同体を作り、守って行こうとする神様の強い意志がある、ということは確かだろう、と思います。聖絶の対象となる人々はそのための生贄の奉げ物である、ということになります。ここに記された三千人もその生贄の奉げもの、と理解できます。しかし、その後のイスラエル歴史をみると、この純粋な信仰の民を形成するという神様の計画は成就しなかった、といわざるをえません。このため、後の事になりますが、新たな約束、新約が必要になったのです。

ここではモーセが「聖絶」を命じ、これが実行されてからモーセによる第二の執成しが始まります。32:30-32をお読みします。「翌日になって、モーセは民に言った。「あなたがたは大きな罪を犯した。それで今、私は主のところに上って行く。たぶんあなたがたの罪のために贖うことができるでしょう。」/そこでモーセは主のところに戻って、申し上げた。「ああ、この民は大きな罪を犯してしまいました。自分たちのために金の神を造ったのです。/今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら－－。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」とあります。「聖絶」によるイスラエルの主なる神への信仰への立ち返りを携え、モーセは神の所へ上って行くというのです。そして、それでも、イスラエルの罪がゆるされないのならば、神様が書かれた書物から、自分の名を消し去っても結構ですので、イスラエルの罪をゆるしてください、というのです。この書物は後に「いのちの書」と呼ばれるようになるもので、神様の傍らにあって、最後の審判のときに救われるべき者の名をしるした書物です。イザヤ書4:3に「シオンに残された者、エルサレムに残った者は、聖と呼ばれるようになる。みなエルサレムでいのちの書にしるされた者である。」とあります。神の裁きの時に、裁きをのがれ、エルサレムに残された者は「いのちの書」に記された者である、というのです。新約の時代になってもこの思想は生きています。新約聖書最後の文書、黙示録20:15には「いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。 」とあります。主イエスの再来の時、最後の審判の時には、「いのちの書」に名のない者は所謂地獄にやられる、というのです。イスラエルの民にとっていのちの書にしるされない、ということは永遠に救いの道からはずされる、ということを意味します。生きている時だけの話ではありません。死んで後も含め、永遠に、です。しかも、地獄の苦しみです。モーセが、イスラエルの許しのために、自分の救いを贖罪の生贄として差し出す決意を語っている、ということです。この心が、イザヤ書53章の「苦難の僕」を経由し、主イエスの十字架に繋がっていることを見ることができます。使徒信条によれば、主イエスは黄泉に下りました。十字架の贖いは、主イエスの名がいのちの書から抹消されることを意味したのです。マタイ福音書27:46の「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という主イエスの叫びはこの「いのちの書」からの末梢に対する叫びであったのです。

すると主なる神は32:33で「わたしに罪を犯した者はだれであれ、わたしの書物から消し去ろう。/しかし、今は行って、わたしがあなたに告げた場所に、民を導け。見よ。わたしの使いが、あなたの前を行く。わたしのさばきの日にわたしが彼らの罪をさばく。」 と言われます。これは裁きの猶予です。まずは、神の使いに導かれ、約束の地カナンに入れ、と言っています。裁きの日に罪の償いをさせるのでそれまで、時の猶予を与える、ということです。出エジプト記ではモーセは約束の地カナンに入ることは許されませんでした。ピスガの頂からカナンの地を見渡す、のみでした。なぜ、主なる神は神の人モーセに対し、そのようなことをされたのでしょうか。このことは出エジプト記の最大の問題点です。いろいろな解釈がありえますが、この罪の償いの猶予に対し、カナンの地を踏ませない、ということが、モーセが払った償いだったのかもしれません。モーセの方からみると、イスラエルの罪の赦しに払った犠牲であった、ということなのでしょう。モーセはこのことに対し、恨み、つらみも言わず、受け入れています。もちろん、モーセはこれにより完全にイスラエルの贖罪が成就したとは思っていなかったでしょうが、自分の救いのしるしであるカナンの地に入ることを放棄するのは当然のことだ、と思っていたことでしょう。

33:1-11は主なる神がイスラエルをカナンの地に入れる計画をのべ、会見の天幕で主に伺いをたて、それに従って行くよう強く勧めている箇所です。そしてモーセが天幕に入るとモーセに語られた、と記されています。33:11には「主は、人が自分の友と語るように、顔と顔とを合わせてモーセに語られた。」とあります。33:3および33:4に二度「うなじのこわい民」ということばがでてきます。この言葉は32:9にすでに出てきていることばです。主なる神への従順さを示さず、自分たちの目先の利害のみから、ぶつぶつ文句を言う強情な民、と言う意味です。神様は、この強情さから再びこの民が重大な罪を犯すことを予知するかの表現をしています。そしてこの強情な民を導く仕事を託されたモーセに語りかけられ、34章で再度、十戒が与えられます。この「顔と顔を合わせて語られた」というのは極めて例外的な表現です。目で神を見ると死ぬ、とされていますから、この「顔と顔を合わせる」というのは霊的なことです。創世記5:24に「エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。」と、エノクの生涯を簡単に表現していますが、このエノクと神の関係が「顔と顔を合わせる」関係であったと推察されます。マタイ福音書17章の最初に主イエスの姿変わりの描写があり、17:2-3で「彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。/しかも、モーセとエリヤが現れてイエスと話し合っているではないか。」とありますが、この時が、「顔と顔を合わせる」状態での話し、と言えるでしょう。キーポイントはエノクのように神とともに歩むことにあります。神がともに歩んでくださることが、祝福の源です。

そして第三の執成しの祈りになります。この箇所は、執成しというより願望と言った方が良いかもしれません。33:12-13で「さて、モーセは主に申し上げた。「ご覧ください。あなたは私に、『この民を連れて上れ』と仰せになります。しかし、だれを私といっしょに遣わすかを知らせてくださいません。しかも、あなたご自身で、『わたしは、あなたを名ざして選び出した。あなたは特にわたしの心にかなっている』と仰せになりました。/今、もしも、私があなたのお心にかなっているのでしたら、どうか、あなたの道を教えてください。そうすれば、私はあなたを知ることができ、あなたのお心にかなうようになれるでしょう。この国民があなたの民であることをお心に留めてください。」と言われています。“私はともに遣わされる者もわからず、孤独の中でこの仕事をしなければならないのでしょうか。あなたは私を心に適った者とおっしゃられているのですから、道をお示しください。このイスラエルの民はあなたの民であることをみ心に留め置いてください”、と祈るのです。罪を犯す民であってもあなたの民なのでその都度、ゆるして下さい、と祈っているようです。これに対し、主なる神は、モーセに対し「わたし自身がいっしょに行って、あなたを休ませよう。」とおっしゃられます。主なる神がモーセと「いっしょに行って」くれる、というのです。直訳すると「私の顔を彼らが歩く」です。“私の顔の前をイスラエルの民が歩くようにさせる”という約束と理解することができます。そしてモーセを「休ませてあげよう」というのです。直訳は「あなたを休めさせる」です。主なる神がイスラエルを導き、モーセは安心して居なさい、とおっしゃられているのです。

この「一緒に行く」は33:15-16で更にモーセの口を通して二度繰り返されます。「それでモーセは申し上げた。「もし、あなたご自身がいっしょにおいでにならないなら、私たちをここから上らせないでください。私とあなたの民とが、あなたのお心にかなっていることは、いったい何によって知られるのでしょう。それは、あなたが私たちといっしょにおいでになって、私とあなたの民が、地上のすべての民と区別されることによるのではないでしょうか。」と言われています。神が共に歩んでくださることが、選ばれた民への祝福の証だ、と言うのです。これがモーセの執成しの祈りの結論です。これは、若干表現は違いますが「神、共に居ます」ということです。これは、讃美歌の歌詞にもなっていますが、信仰者に与えられる最大の光栄であるとともに、最高の恵みです。パウロが手紙のなかで使用する「主にあって」という言葉もこの流れにある言葉です。

また、主なる神がモーセに「あなたを休ませよう」とおっしゃっていることも大いなる福音です。主なる神の導きに一切を委ねるなら、心に安らぎが与えられる、というのです。この「休ませる」と言う言葉はギリシャ語訳旧約聖書では「katapauo:」という動詞です。新約聖書のマタイ11:28でイエス様がおっしゃっている「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」の御言葉の「休ませる」という言葉のギリシャ語は「anapauo:」と言う言葉です。どちらも「pauo:」（やめさせる、静める）に接頭語がついた言葉です。同系列の言葉です。即ち、出エジプト記で神様がモーセにおっしゃられた「休ませてよう」という言葉が、新約に於いて主イエスが我々におっしゃられた言葉として語られているのです。モーセに対し、安心していきなさい、とおっしゃられたことが、私たちにも安心していきなさい、とのことばとして繋がっているのです。安心して休んでいられるのは神の導きに委ねるからです。主イエスに一切を委ねると、安心、休息が得られる、ということです。

このモーセの祈りをうけて33:17-23の記述があります。神様がその完全な自由をもって「わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ」と宣言されていますが、正直なところ、イスラエルの民はこの祝福を得続けられるのか、不安が付きまとう事も事実です。

以上のモーセによる三つの執成しの祈りを振り返ると、執成しの祈りの重大さがせまってきます。第一の執成しは主なる神への「思い直し」を願い求めるものでした。第二の執成しは自分の救いを犠牲にしても、イスラエルの罪の許しを願うものでした。第三の執成しは、主なる神が共に歩んでくださることを切々と祈り、願うものでした。私たちも他人のため、世界のための執成しの祈りをしますが、最後は一切を主の導きに委ねる信仰に行きつきたい、と願う者です。一言、祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日は出エジプト記のなかからモーセの執成しの祈りを学びました。あのイスラエルの救いのドラマである出エジプトのなかで不平を呟く民のために祈ったモーセの祈りは、主イエスのゲッセマネにおける我々のための執成しの祈りに通ずるものです。どうぞ私たちを、執成しの祈りに聞き、証の人生をおくる者としてください。高慢さを打ち砕き賜い、一切を主に委ねることができる信仰をお与えください。主イエス・キリストの名によって祈ります）